

第17回日本在宅医学会大会 シンポジスト 抄録集・ホームページ掲載用原稿

シンポジウムテーマ		「生きかたー逝きかた」を支える施設でのみとり 工夫や苦勞を共有しましょう			
開催日	2015年4月26日(日)	時間	9:00-10:30	収容人数	500名
講師情報	ふりがな	姓	たかぐち	名	みつこ
	ご芳名		高口		光子
	ご所属	介護老人保健施設 星のしずく			
	部署		役職	看介護部長	
演題名 (80字以内)					
介護老人保健施設での看取り 『「介護老人保健施設＝生活支援の場」におけるターミナルケアの意味と位置づけ』～真なる家庭復帰とは何か～					
ご略歴 (300字以内)					
高知医療学院を卒業後、理学療法士として福岡の病院に勤務するも、老人医療の現実と矛盾を知る。より生活に密着した介護を求め、特養ホームに介護職として勤務。介護部長、デイサービスセンター長、在宅部長を歴任した後、2002年4月に静岡の医療法人財団百葉の会、法人事務局企画教育推進室室長及び生活リハビリ推進室室長を兼務する傍ら介護アドバイザーとして全国を飛び回る毎日を送った。2006年に老健「鶴舞乃城」の立ち上げに携わり、翌年4月に看介護部長となる。2012年5月には新規の老健「星のしずく」の立ち上げに携わり看介護部長を兼任する。現場を守りながら若い運営スタッフやリーダー育成に取り組む一方で、講演、執筆活動、ブログ、NHKに出演し、現場からの等身大の発言・提案で現場を変革させようと精力的に日々を送る。					
講演概要 (1000字以内)					
<p>当時、老人保健施設は「介護もなければ医療もない」と批判されていた。</p> <p>それは3か月・6か月と期限を決めつけ「リハビリ訓練」を受けたら「家に帰される」さもなければ、「ヨソに行って下さい」という一方的なサービス提供状況が、認知症高齢者をはじめ利用者・家族を苦しめていたからである。そして、介護保険が施行され「本人・家族の意向に沿ったサービス提供」の継続から、私たちは在宅復帰に利用者の重症度は決定的要因ではないことに気づいた。</p> <p>本人・家族にとって「この人と一緒に暮らす意味」を地域とともに見い出せた時、人は「家に帰る」。</p> <p>親が年を取り、疾患・障害を持つと家族の日常が壊れる。家族は「日常から親を抜く＝施設入居」を選んで、日常を再建する。そこには、「親を捨てた」という内罰性が残る。しかし、利用者本人が家庭では見られなかった笑顔や落ち着きを取り戻すと「私たちの選択は間違っていなかった」と家族関係が再生する。</p> <p>この経験をもって、更に長期化・重度化・高齢化すると当然「ターミナル期」となり、その時、本人・家族はもう一度施設を選ぶ。</p> <p>それは、「家で死にたい・死なせたい。けれど、現実は無理。だけど病院はいやだ。」というニーズに基づく。</p> <p>病院はいやだ。というのは、身体拘束の常態化、一方的な延命行為、できれば、薬・点滴・酸素吸入もせず、自然に逝きたい。何より病院には、今まで積み上げた人間関係がない、ということである。</p> <p>病名で死ぬのではなく、ただ一つの名前を持った、一人の人として見送られたい・見送りたいという思いが、そこにある。</p> <p>病院のすごいところは、昨日・今日出会った人の命を見届けることができるところだ。私たちに、これはできない。施設は、初めて出会ったその時から繰り返す、食事・排泄・入浴＝日常から培った、利用者・家族・職員の関係の中で一人の人を見送ることができる。</p> <p>この時私たちは、人体のみではなく、人生に関わった結果としての「家庭復帰」を果たす。</p>					